



## 第2回「カエルのラインダンス」の巻

高崎からアリゾナ州に移住すると決めた2013年の夏休み。アメリカからは、なかなか東南アジアには行かなくなるからと、ちょっと奮発して、夫とインドネシアのバリ島を訪れた時のことです。ある日の夕食で思い切って注文したのは「カエルのモモ肉のソテー」。好き嫌いの少ないわたしですが、カエルは例外。カエルの写真を触ることすらできない、カエル恐怖症だったのです。ドキドキしながら待ち受けたカエル料理ですが、出てきたお皿を見て、笑い出してしまいました。懐かしい光景を思い出したのです。

ミレニアムが近づく頃、イギリス西部の小都市に、1年ほど暮らしたことがありました。当時の連れ合いは大学院で遺伝子研究に没頭しており、いつ帰宅するともわからない日々。本を読むのも、日本に手紙を書くのも飽きてしまって、大学の市民講座で手話 (British Sign Language) を習うことにしました。クラスメートは、美容師をしているイギリス人のエリンと、ドイツの留学生ミロス。講師のアンジェラは先天性聾者でしたから、手話だけで手話を教えてくれました。イギリス英語がなかなか聞き取れず、「英語」が話せるはずだったのにと焦る日々でしたが、エリンやミロスがボカンとしている時にも、わたしにはアンジェラの手話が読みとれることもあり、クラスの帰りに3人でコーヒーを飲みながら、片言の手話で会話練習をするのは、楽しい時間でした。陽気なアンジェラの手話クラスはユーモアたっぷり。「道に落ちていたバナナの皮を踏んで、滑って転んでしまい、周りの人に見られて恥ずかしかった」という小咄を手話でしてくれた様子は今も忘れられません。みなさんに紙面でお伝えするのは難しいの

で、今日のところは別の手話をご紹介します。それは、アンジェラが子どもの頃、お父さんに教わったという、ラインダンスの手話。親指を内側に入れて両手を握り、人差し指同士がくっつくように手を揃えたら、人差し指と中指をゲンコツから外して、まっすぐ前に伸ばします。この4本の指がダンサーのセクシーな脚です。指を調子に合わせてひょいひょいと曲げ伸ばしすると、お揃いのドレスを着たラインダンサーが、並んで踊っているように、相手からは見えます。幼いアンジェラは、お父さんに、ラインダンスのお話をするとよくせがんだのだそうです。

くだんのカエル料理は、こんがりジューシーなモモ肉が6つほど、白いお皿の上にならずりと盛り付けられていました。モモから飛び出た、ほっそりしたスネの骨が上むきに行儀よく並んだ光景に、ラインダンスの手話を見せてくれた、アンジェラの細く長い指が、フラッシュバックのように蘇りました。自分の道が見えなかった異国での日々。

この後ろ足のキックで、カエルは前に進むんだなあと思いつつ、繊細な骨をしゃぶって、ソテーをいただきました。かつてのわたしをおびやかしていたのは、カエルたちの驚くべき跳躍力、頼りなく薄い皮膚で身を包んでいながら、思い切り、いきなり、方向を定めて飛べる、ひたむきさだったのかもしれませんが、いつかそんなふうに生きてみたいという、内なる願望に気づけずいたからでしょうか。アリゾナへの移住を後悔したことは、そういえば一度もありません。カエルも、いつの間にか、愛おしく思えるようになったのは不思議です